

写真は語る 鈴木知之「記憶の中の町並み」

ナショナル ジオグラフィック日本版 2012年9月30日発行・発売(毎月1回30日発行・発売) 第18巻第10号(1995年7月3日第3種郵便物認可)

五輪へと変貌するリオ 90

ムスタン王国 謎の洞窟群 118

NATIONAL 10 GEOGRAPHIC 2012

ナショナル ジオグラフィック 日本版


象牙と信仰 38

語られざる真実

生命躍る中米の青い海 68

進化の結晶 素晴らしき葉 108

北欧 廃屋の動物たち 138



毎年、数万頭のゾウが殺されている。
象牙目当ての密猟だ。そうした象牙の多くが
聖像や仏像に加工され、宗教に使われている。
フィリピンやタイ、中国での実態に迫った。

象牙と信仰

その語られざる真実

ケニアのツァボ国立公園に生息するゾウたち。大きな象牙1本は、地元の闇市場に持っていけば約50万円で売れる。この国の未熟練労働者が10年働いてようやく稼げる賃金に相当する額だ。



高価な象牙の聖像がいくつも飾られたフィリピン人コレクターの自宅。別のコレクターは象牙が使われていることについて、「ゾウのものだという意識はない。神のたまものだ」と話す。



カメルーンのパバンジダ国立公園で無残な姿となって横たわるゾウたち。密猟者たちは自動小銃や携帯式ロケット弾を使って300頭余りを殺し、牙を持ち去った。ここ数十年で最大規模の大量殺害だ。



中国最大の象牙彫刻工場で、工芸品に仕上げを施す作業員。この彫刻は繁栄を表すとされる。中国は2008年に
アフリカから65.8トンの象牙を合法的に買い付けた。以来、ゾウの密猟も象牙の密輸も急増している。

今

年1月、100人ほどの密猟団がチャドから馬に乗ってカメルーンのブバ・ンジダ国立公園に侵入し、数百頭のゾウを惨殺した。一団はAK-47自動小銃と携帯式ロケット弾で武装し、軍事作戦のような正確さで犯行に及んだ。1989年に象牙の国際取引が禁止されて以降に起きたゾウの大量殺害事件のなかでも、最悪の部類に入る惨事だ。

現在、密猟されるゾウの数は過去10年で最も多くなり、違法な象牙の押収量もここ何年かで最大となった。ブバ・ンジダ国立公園の事件現場を空から眺めると、死体が散乱するさまは残酷きわまりない。逃げ惑う途中で殺されたゾウ、子を必死に守ろうとした母親、おびえきった50頭の群れが一度に殺された現場……。殺害の様子が手に取るようにわかる。アフリカでは毎年、こうして数万頭ものゾウが密猟によって殺されている。

フィリピンのセブ島へ

信徒で埋め尽くされた教会で、侍者の少年たちが、小さな聖像に着せてある衣装を一枚ずつ脱がせていく。小さな王冠、赤いケープ、長靴、下着が取り去られると、木の像が姿を現した。この像は「サント・ニーニョ・デ・セブ(セブ島の幼きイエス)」と呼ばれるフィリピンで最も大切にされている聖像で、1521年に探検家のフェルディナンド・マゼランが持ち込んだとされる像の複製だ。裸にされた木像は、水を満たした数個の樽に次々と浸される。その水は聖水として教会の外で売られるのだ。

儀式を執り行ったのは、フィリピン屈指の象牙コレクターとして知られるモンシニョール・クリストバル・ガルシアだ。2005年のダラス・モーニング・ニュース紙の報道と訴訟記録によると、ガルシアは米国ロサンゼルス^の聖ドミニコ教会の司祭だった1980年代半ば、10代前半の侍者の少年に性的虐待を加え、教会を追われた。

フィリピンに帰国した後、モンシニョール(高位聖職者を指す敬称)と呼ばれる地位に就き、セブ島大司教区の典礼委員長に昇進した。

フィリピンはブラジル、メキシコに次ぐ世界第3位のカトリック教国で、信徒数は7500万人。セブ島大司教区はそのうち400万人近くを抱えるフィリピン最大のカトリック大司教区だ。1990年に当時のローマ法王ヨハネ・パウロ2世の別荘を訪ねた際、ガルシアは持参したサント・ニーニョ像を法王に祝別(祈って神聖なものにすること)してもらった。彼は地元では有名人で、通行人に「モンシニョール・クリスは?」と聞くだけで教会の場所がわかった。

フィリピン人の中には、セブ島のサント・ニーニョをイエスそのものと信じる人もいる。16世紀にフィリピン諸島を植民地にしたスペイン人は、サント・ニーニョに奇跡を起こす力があると信じて、キリスト教を広めた。当時の木像はフ



ケニアで押収された象牙。密輸は防いでも、死んだゾウは生き返らない。象牙はまだ小さいことから、殺されたのは若いゾウだとわかる。

フィリピンのカトリック信仰の基盤となり、今ではセブ島のサント・ニーニョ教会堂にある防弾ガラスのケースに収まっている。

「サント・ニーニョに奉仕しなければ、本物のフィリピン人とは言えません」。そう話すのは、マニラ郊外にあるマロロス教区博物館の館長、ビンセンテ・リナ・ジュニア神父(ジェイ神父)だ。「フィリピン人なら誰でもサント・ニーニョ像を持っています。橋の下で暮らす人だってね」

毎年1月にセブ島で催されるサント・ニーニョ祭には、およそ200万人の信徒が集まり、何時間もパレードを繰り広げる。ほとんどの人が木製やグラスファイバー製の小さなサント・ニーニョ像を持参している。聖像に金をかければ、御利益も大きくなると信じている人も多く、木製の像などでは不十分だと考える信徒も少なくない。そうした人々が買い求めるのが、象牙でできた高価なサント・ニーニョ像だ。

ガルシアのミサのとき、私は聖体拝領を受けようと前に進み出た。自分を印象づけるため、立ったままではなく、ひざまずいた。

「ご聖体を受けますか」とガルシアが言った。「アーメン」と私は答え、舌でパンを受けた。礼拝後、ガルシアにナショナル ジオグラフィック誌の取材で来たことを告げ、サント・ニーニョについて話を聞く約束を取りつけた。

ガルシアの控え室に入ると、大きな聖像がガラスのケースにいくつも陳列されていた。それらの頭部や手は象牙製だ。フィリピンで見かける象牙の聖像は、全体が象牙でできたものもあるが、豪華な衣装で隠れる体の部分が木製で、頭部と手だけが象牙でできたものもある。

筆者ブライアン・クリスティ(Bryan Christy)は2010年1月号「売られる野生動物」を執筆している。写真家ブレント・スタートン(Brent Stirton)は2012年3月号「サイの悲鳴」で世界報道写真コンテストに入賞した。

私は、眠っている姿の象牙のサント・ニーニョ像が欲しいと申し出た。「こんなふうにと下唇に指を当てると、「おねんねしているスタイルですな」とガルシアは満足げに言った。

ガルシアに会ったのは、フィリピンの象牙取引の実態を探り、できれば元締めを突き止める手がかりを得たかったからだ。

マニラの税関は2005年に7トン、2009年に4.9トンの違法な象牙を押収した。台湾でも2006年にフィリピン向けの違法象牙5.5トンが押収されている。1頭のゾウから平均で10キロの象牙がとれるとすると、これだけで1740頭のゾウが殺された計算になる。野生生物の国際取引のルールを定めた「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」（通称ワシントン条約、英語の頭文字をとってCITESとも呼ばれる）の事務局によると、フィリピンは中国に密輸される象牙の中継地にすぎないという。

フィリピン税関のホセ・ユーチョンゴ監視部長は2009年に違法象牙を大量に摘発した後、マニラの新聞の取材に応じ、「フィリピンには密輸象牙がよく持ち込まれます。カトリック教徒の間で象牙の聖像の人気の高いからでしょう」と語っている。セブ島では象牙と教会は結びつきが強く、象牙を指す現地の言葉「ガーリン」には「聖像」という意味もあるほどだ。

象牙は神への捧げ物

「これも象牙、あれも象牙です」。バチカンのサンピエトロ広場にあるサベッリ画廊の販売スタッフは言った。「こんなにあるとは思わなかったでしょう。顔にそう書いてありますよ」

ローマ法王庁は最近、国際的な犯罪に厳しく対処する姿勢を見せ、麻薬密輸やテロ、組織犯罪に関する協定に調印した。しかし、ワシントン条約には調印しておらず、象牙の輸入は禁止されていない。この画廊では、客が象牙



マニラの博物館に収蔵されている17世紀初めの象牙のキリスト像。長さ77センチで、1本の牙から彫られた。

の十字架を買ったら、バチカンの司祭に祝別してもらった上で送り届けるサービスをしている。

伝統的に象牙はビリヤードの玉やピアノの鍵盤盤、洋服ブラシの持ち手などに使われてきた。そうした製品には他の素材を代用するようになったが、宗教の世界では依然として象牙が使われている。レバノンのミシェル・スレイマン大統領は昨年、ローマ法王ベネディクト16世に象牙と黄金でできた香炉を贈っているし、2007年にはフィリピンのグロリア・マカバガル・アロヨ大統領がローマ法王に象牙のサント・ニーニョ像を贈呈した。象牙禁輸を世界に訴えたケニアのダニエル・アラップ・モイ大統領でさえも、法王に未加工の象牙を1本贈ったことがある（モイ大統領はその後、違法取引を防ぐため、国産の象牙12トンを焼却している）。

マニラ郊外にある2階建ての建物で開かれた、サント・ニーニョ像の展示会に行ってみた。これはジェイ神父が取り仕切る毎年恒例の催しで、教区の信徒たちが自慢のサント・ニーニョ

像を披露する場となっている。王侯貴族のように着飾った青白い小さな聖像が200体余りも並び、その間は生花で埋め尽くされている。金メッキの王冠や数々の宝飾品、高級クリスタルガラスのネックレスで飾り立てた象牙のサント・ニーニョ像もあった。

こうした豪華な装飾が施された聖像の持ち主は、意外にもつまましい暮らしをしていることが多い。「これは贅沢^{ぜいたく}ではありません。神様へ

他の素材を代用できる ようになった今も、 宗教の世界では依然として 象牙が使われている。

の捧げ物なんです」と、ジェイ神父は説明する。

神父が、ハトを手にしたサント・ニーニョ像を指さした。「古い象牙はほとんどが先祖伝来の家宝ですが、新しい象牙はアフリカ産で、裏口から入ってきたものです」。つまり、密輸品だということだ。「悪を善に変えるようなものです。出所の曖昧な象牙を買って、聖像にする」。神父はくすくす笑って、声をひそめた。「盗品を買っているみたいなのでからね」

神父は新品の像を買うよう信徒に勧めているという。お茶やコーラに浸して古く見せかけた像をつかまされないようにするためだ。「新しい象牙の像を買えば、その歴史が自分から始まると、言って聞かせるんです」

フィリピンへの流入ルートについて聞くと、神父はミンダナオ島南部のイスラム教徒が中継すると言い、私のシャツのポケットに指を2本突っ込むしぐさをした。賄賂のジェスチャーだ。「た

とえば沿岸警備隊にね。途中で何度も賄賂を渡して、ようやく自分の国に運ばれてくるんですよ」。そうやって賄賂を渡し続けることもサント・ニーニョへの献身のうち。信仰の証しとして象牙を密輸するという理屈である。

聖職者“直伝”の密輸テクニック

ガルシアが犯罪に手を染めていることを自分から打ち明けるなどとは期待していなかった。だが、象牙のサント・ニーニョ像を買いたいと言うと、意外な言葉が返ってきた。「税関の目をごまかして米国に持ち込む必要がありますね」

「どうやって」

「着古した臭い下着に包んで、ケチャップをかけるといいですよ。血で汚れたように見せるんです。そうすれば、まず大丈夫」

ガルシアはお気に入りの象牙彫刻師を何人か教えてくれた。いずれもマニラ在住だ。スーツケースに隠せないほど大きな像なら、古い制作年代が記載されたフィリピン国立博物館の証明書を手に入るか、彫刻師に頼んで、模造品であることの証明書か、象牙の禁輸以前に彫った証明書を発行してもらえばいいという。どんな像でも自分が祝別すると、ガルシアは約束した。「象牙の像は祝別しないなんて言うのは、動物愛護ばかり叫ぶ頭の固い司祭ですよ」

マニラでは象牙彫刻の大半を、数家族が請け負っている。フィリピンには5回訪れ、ガルシアに教わった工房を片っ端から回り、さらに他の工房にも行って、象牙を買いたいと話をもちかけた。一度ならず、あなたは司祭かと聞かれたし、ほとんどの工房で米国に持ち込む方法を教えてくれた。水彩絵の具で茶色に塗って木製に見せかけたらいよいよと言う人もいれば、本物そっくりの模造品を樹脂でいくつか作って、その中に象牙の像を紛れ込ませればいいと言う人もいた。税関で止められたら、樹脂製だと言えればいいというのだ。（54ページへ続く）



タイの寺院でアジアゾウを飼育している、「ゾウ僧侶」ことクルバ・ダルマムニ。
お守り用の象牙をとるために、ゾウを1頭餓死させたと批判されているが、本人は否定している。

アフリカで密猟されるゾウ

アフリカゾウは人口の増加によって生息地を失い、以前から数が減少傾向にある。そこに追い打ちをかけるのが、象牙目当ての密猟だ。密猟で殺されたゾウの割合は、監視地域(地図)で見つかった死体の死因を基に推定されている。

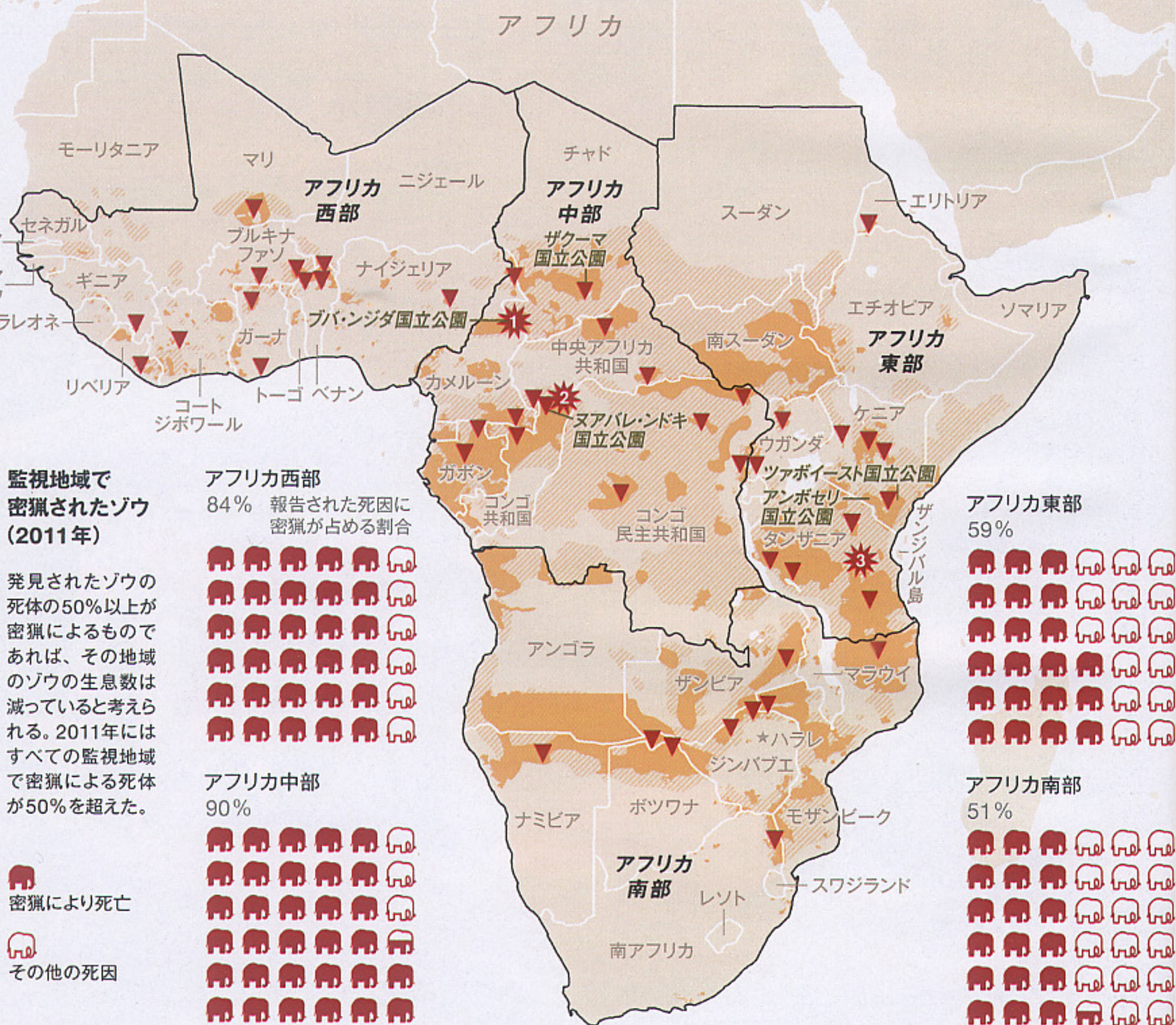
監視されているアフリカゾウの生息域

▼ ゾウの密猟を監視している公園や保護区

アフリカゾウの生息域と推定生息数

1979年 130万頭

2007年 47万2000~69万頭



大規模な密猟

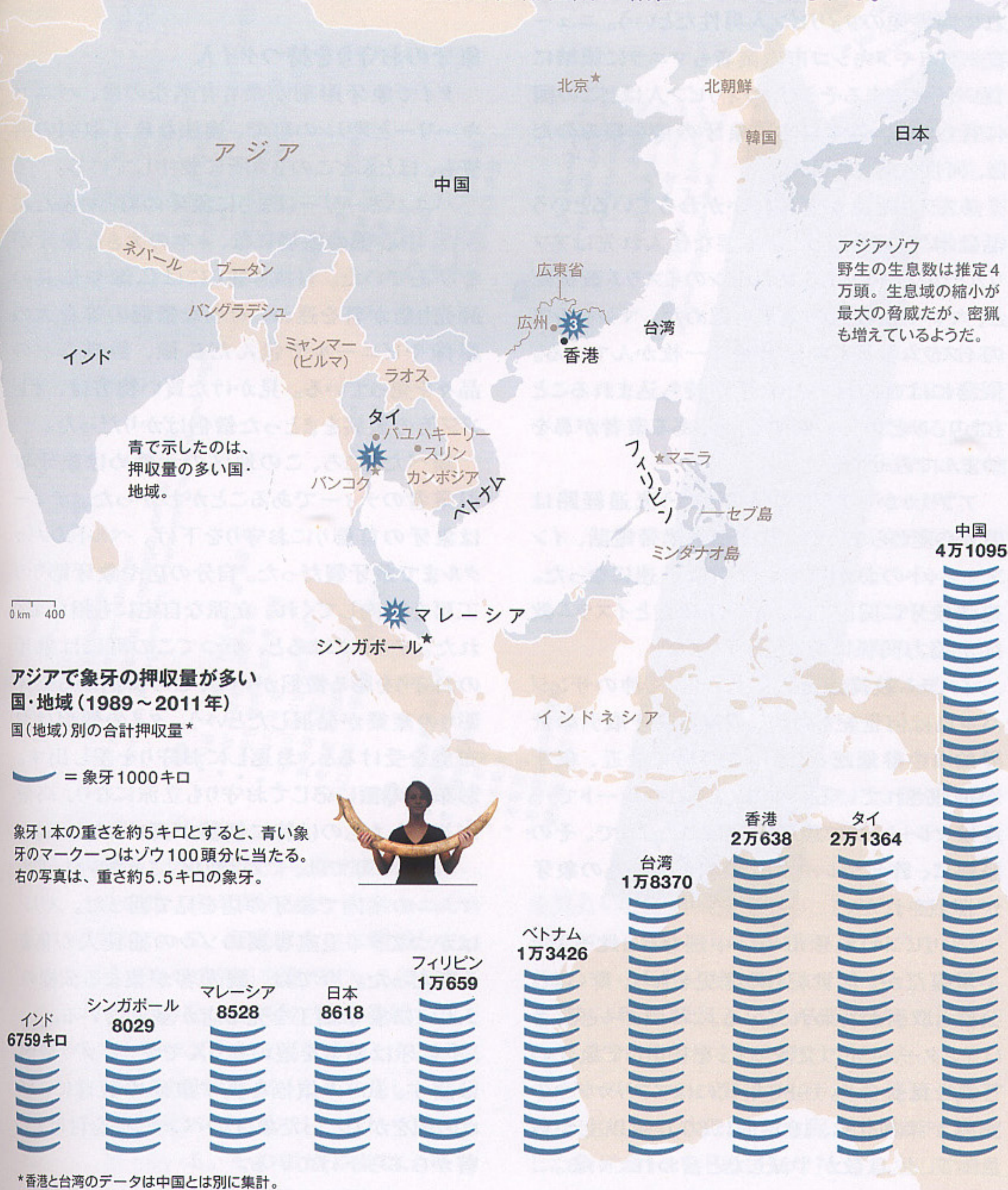
★ **カメルーン** 2012年初め
チャドとスーダンから馬に乗った密猟団がブバンジダ国立公園に侵入し、300頭余りを殺害。

★ **コンゴ** 2006~2011年
ヌアバレ・ンドキ国立公園の外で5000頭近くが死亡。伐採用の道路が整備されたのが原因の一つ。

★ **タンザニア** 2012年
アジア向けの違法象牙の主な出荷国。密猟者は公園の管理者に気づかれないよう、毒で殺す。

アジアに密輸される象牙

世界の大半の国々が1989年の象牙禁輸に同意しているが、中国の経済成長に伴ってアジアで需要が急増している。押収された象牙は流通量のごく一部で、大量に押収される例が増えていることから、大規模な密輸組織が暗躍しているとみられる。



あの手この手の密輸

★ **タイ・バンコク** 2011年
ケニア発の冷凍サバのコンテナから象牙247本を発見。当局の推定で約2億4000万円の価値がある。

★ **マレーシア** 2011年
タンザニア発の再生プラスチックのコンテナに、中国に送られる象牙700本近くが入っていた。

★ **中国広東省** 2009年
フィリピンから戻った中国漁船で、770本の象牙(牙の全体と一部)が入った5個の木箱を発見。

マニラで最も有名な象牙業者の話では、主な顧客は聖職者、外国に住むフィリピン人、それに同性愛のフィリピン人男性だという。ニューヨーク市やメキシコ市の業者もマニラに頻繁に買い付けに来るそうだ。フィリピン人はどこの国に行っても、必ず自宅に象牙の像を祭るのだと、何度も聞かされた。

イスラム教徒が密輸にかかわっているという話は本当のようだった。主要な仕入れ先はアフリカとつながりのあるフィリピンのイスラム教徒だと、マニラの数人の業者も認めた。マレーシアのイスラム教徒も象牙密輸に一枚かんでいる。「ときには血の付いた象牙が持ち込まれることもあり、ひどい臭いがする」と、ある業者が鼻をつまんでみせた。

アフリカからアジアに入るという流通経路は昔から変わらないが、航空便や携帯電話、インターネットのおかげで、取引は迅速になった。違法象牙に関しては、キリスト教徒とイスラム教徒が協力関係にあるということだ。

イスラム教徒が暮らすタンザニア沖のザンジバル島は何世紀もの間、奴隷と象牙取引の世界的な中継地だったが、この島で最近、象牙が押収されている。少なくともこのルートで一度はマレーシアに象牙が運ばれたようで、その証拠に、昨年マレーシアでは何万トンもの象牙が押収された。

フィリピンの象牙市場は中国などと比べると小規模だが、何世紀もの歴史をもち、驚くほど公然と取引が行われている。コレクターと業者はインターネットの交流サイトを利用して象牙の写真を見せ合う。1980年代にはアフリカゾウの密猟が深刻化し、10年間に60万頭以上が殺されて、生息数が半減したと言われている。

ワシントン条約による1989年の禁輸措置は、密猟に終止符を打ち、ゾウの絶滅を防ぐために導入された。条約の履行を監視する役目を担う事務局が、これほどあからさまなフィリピン

の象牙取引を見逃しているとすれば、見逃している取引は他にも山ほどあるのではないか。

象牙のお守りを持つタイ人

タイで象牙彫刻が最も有名なのは、パユハキーリーとスリンの町で、違法な象牙取引の捜査も、ほとんどこの2カ所に集中している。

パユハキーリーはまさに象牙の町といった趣きで、中心部の広場には、4本の大きな象牙がそびえていた。目抜き通りには仏像や仏具の卸売り店が軒を連ね、有名な僧侶の等身大の彫像やビニールで包んだ仏像、数珠などの品々を売っている。見かけた買い物客は、オレンジ色の袈裟をまとった僧侶ばかりだった。

調べたところ、この地区の元締めは象牙取引業者のティーであることがわかった。ティーは象牙の首飾りにお守りを下げ、ベルトのバックルまで象牙製だった。自分の店や象牙彫りの工房を案内してくれ、立派な自宅にも招いてくれた。ティーによると、かつてこの町には象牙のお守りを彫る僧侶がいて、この僧侶から象牙彫りの産業が発展したという。タイの僧侶はお布施を受けると、お返しにお守りを差し出す。お布施の額に応じてお守りも立派になり、高僧が祈祷したものは特に価値が高いとされる。

スリンの町では、「ゾウ僧侶」ことクルバ・ダルマムニの案内で象牙の店を見て回った。スリンはかつてタイ王室専属のゾウの捕獲人が集まる町だった。今では、観光客が集まる公園の入り口に象牙細工を売る店が並んでいる。

「象牙は悪霊を追い払うんです」とゾウ僧侶は話す。108の煩惱を表す象牙の数珠に、ゾウの頭をかたどった象牙のペンダントを付けて、首からぶら下げている。

ゾウはタイを象徴する動物で、仏教でも神聖な動物とされている。伝説では、王妃マーヤーがブッダを身ごもった夜、6本の牙をもつ白いゾウが右の脇腹に入る夢を見たと言われている。

る。ゾウ僧侶は信者が世界に10万人いると言っていたが、私が寺院を訪れたときには数人しかいなかった。彼らはゾウ僧侶の前にひざまずいてお布施を差し出し、お守りをもらっていた。

お守りを身に着けているタイ人は多く、なかには何十個も着けている人もいる。バンコクのお守り市場では、無数の行商人や露天商が金属や骨、象牙で作ったお守りを売っていて、800万円以上する高級品もある。タクシーに乗

マニラでは、どの工房でも 必ずと言っていいほど、 米国に象牙を持ち込む方法を 教えてくれた。

れば、ほぼすべての車のバックミラーにお守りが下がっている。

ゾウ僧侶の主な収入源はお守りだ。自分の像や仏像の他に、亡くなった妊婦の頭蓋骨のかけらをプラスチックの型に封じ込めたもの、死体から採った油、墓地から集めた土、トラの毛皮、ゾウの皮、象牙彫りなど、奇妙なお守りを取りそろえている。商売は大いに繁盛していて、新しく「ゾウの寺院」を建てているほどだ。

ゾウ僧侶は最近、テレビの報道番組で皮と象牙をとるためにゾウを餓死させたとすっぱ抜かれた。本人は自然死だったと主張し、象牙やゾウの皮が欲しければスリンではいくらでも買えると言っている。その報道以前は土産物店とオンラインショップ、外国での販売で、月におよそ100万バーツ(約250万円)を稼いでいたが、今は30万バーツほどまでに売り上げが落ち込んだそうだ。それでも、マレーシアとシン

ガポールを3日間回っただけで、信者にお守りを売って100万バーツ以上稼げると豪語する。

タイには、少数ながら野生のアジアゾウが生息している。アジアゾウは絶滅危惧種に指定され、長年国際取引を禁止されてきた。だがタイ国内では、規制はさほど厳しくない。ゾウ使いなどは、飼育している生きたゾウの牙の先端や、自然死したゾウの牙を売却できる。密輸業者は長年、この制度を悪用して、アフリカ産の象牙をアジアゾウの牙に混ぜて売ってきた。

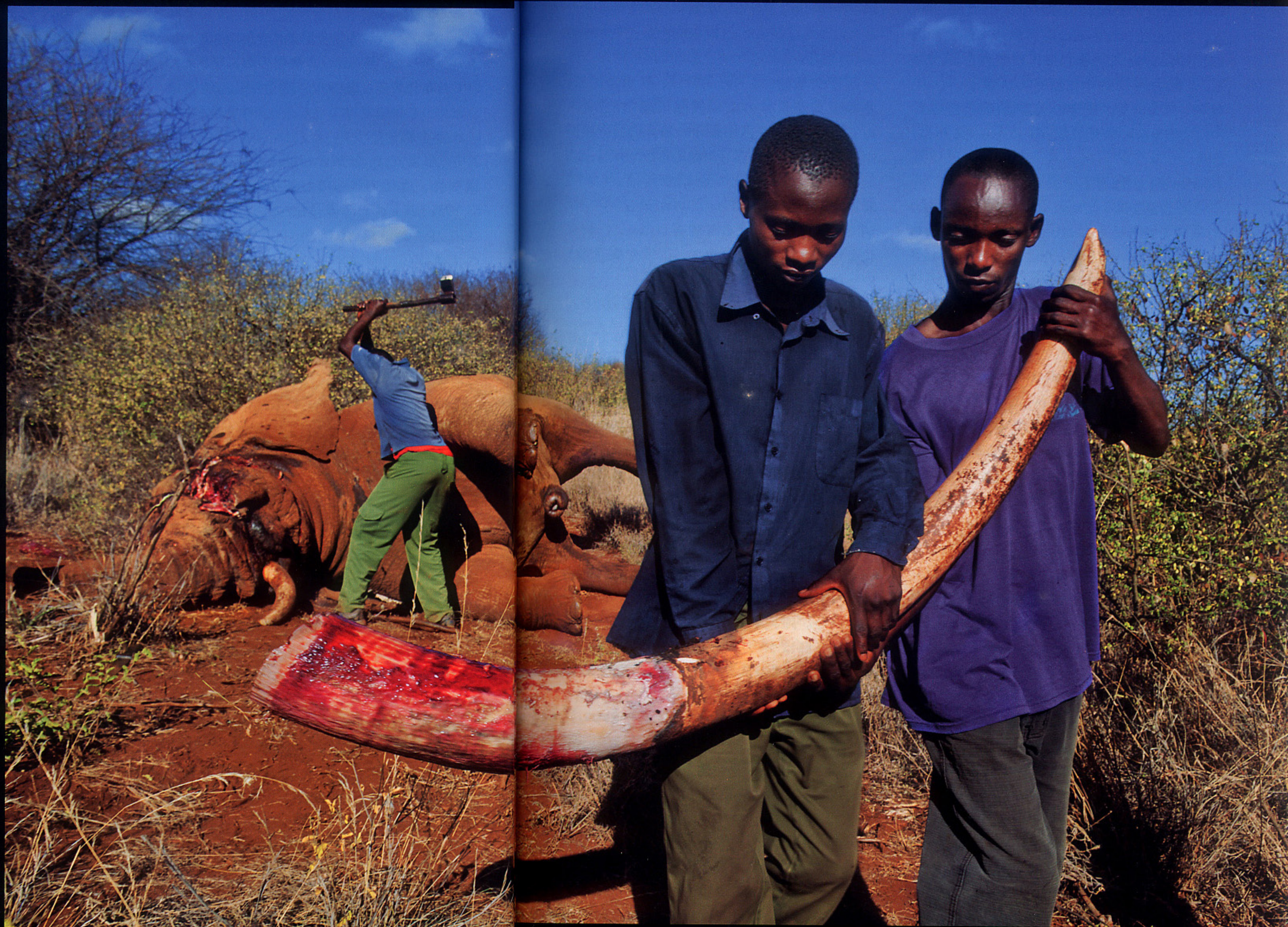
保護活動家たちはこれを「タイの抜け穴」と呼ぶが、世界にはさらに大きな抜け穴がある。1989年の禁輸以前に輸入されたアフリカ産象牙の国内取引は今でも認められているので、象牙の所持が問題になったら、「これは禁輸以前のものだ」と言えば済むというわけだ。

タイの象牙市場は成長中だ。「象牙の取引業者は在庫を増やしています」と、バンコクに本部のある非政府組織(NGO)「フリーランド財団」のステーブ・ガルスター代表は話す。「禁輸措置が緩和された“前歴”があるので、リスクは少ないとみているんです」

フィリピンと同じく、タイにも密輸業者に好都合な状況がある。当局の腐敗だ。最近、タイ税関が押収したアフリカ産の象牙1トンが、倉庫から消えるという事件があった。残った象牙を見たいと税関に取材を申し込むと、断られたばかりか、ジャーナリストが盗んだような話をされた。いや、そうとは聞いていないと言いつつ、実は税関職員が盗んだ疑いがもたれていると、ようやく真相を打ち明けてくれた。

ちなみに、フィリピンでも汚職の蔓延はひどい。2006年には野生生物保護当局が、押収した象牙数トンを「紛失した」として、税関職員を告発した。税関はこれに懲りて、次に押収した大量の象牙を当局に引き渡したが、今度は当局の倉庫に保管されていた象牙の山がプラスチックの偽物にすり替わる事件が起きた。

ケニアのアンボセリ国立公園で、私服のレンジャーが密猟者に殺された雄ゾウの牙を抜き、闇市場で売られないよう持ち去る。2012年前半、ケニアではゾウを守ろうとして公園のレンジャー6人が死亡している。一方でレンジャーが殺した密猟者は23人にのぼる。



ゾウ僧侶のお気に入りの象牙彫刻師、ジムの自宅を訪ねた。家は町外れの未舗装の道路沿いにあり、その前に並んだ屋台をよく見ると、ガラスケースの中に象牙の仏像がいくつも陳列されていた。象牙の大半は国産だ。

「アフリカ産の象牙でも、彫ってもらえるかね」と聞いてみた。

「ダーイ(できます)」

その会話を聞いていたゾウ僧侶が、アフリカ産象牙を持ち込むには、スーツケースに入る長さに切ればいいと言った。どのくらいの長さにするか、わざわざ手で示し、信者たちはそうしていると言う。入国管理局には信者がいるし、たとえ空港で問題が起きても、自分の寺院に持っていく象牙だと言えればいいと、ゾウ僧侶は請け合った。どうやら宗教を持ち出せば、違法象牙でもすんなり通るらしい。

チェスの駒にする象牙なら、密輸品かどうか念入りに調べられるが、宗教的な用途なら出所が問われることはない。つまり、宗教もまた規制の抜け穴になっているということだ。

需要が急増する中国

北京象牙彫刻工場は臭いといい音といい、歯科医院を大規模にしたような場所だ。実際、作業も似たようなもので、電気ドリルで象牙に穴を開ける音が響く。窓もドアの枠も削りかすに覆われ、中を見て回っていると、私の歯にも削りかすがたっぷりくっついた。男女の作業員が彫っているのは、福祿寿や布袋、観音菩薩など、人々の信仰を集める像ばかり。どこであれ、象牙がある所には宗教がついて回るようだ。

北京の中心部には、外国の高級車のディーラーや高級ブランド店がひしめく。その近くにある象牙の工芸品店に足を運んだ。純金の延べ棒の自動販売機が置かれたビルの1階からエスカレーターに乗り、ひすいや絹の店を過ぎると、その店がある。象牙の観音像は値札にあま

りに多くの「0」が並び、店員に値段を確かめなければならなかった。1360000.00元(約1700万円)だという。

象牙が禁輸になった当時は、欧米諸国と日本の需要が世界の象牙製品市場の8割を占めていたが、今や違法象牙の最大の買い手が中国だというのは、誰もが認めるところだ。ここ数年に各国が押収した密輸象牙は、アフリカ諸国を除くと、中国絡みのものが最も多い。中国では贅沢品を買える富裕層が増え、伝統文化を見直す余裕も生まれて、仏像や観音像といった工芸品が人気を呼んでいる。

「中国人がみんなカネの亡者だと思ったら大間違いです」。そう話すのは、老舗ホテルの北京貴賓楼飯店に仏教美術のギャラリーを開いている広告会社重役の薛平だ。薛は、2007年にネパールからインドまでブッダの生涯をたどる旅をしたときに啓示を得て、ブッダのために善行を積もうと決心したという。帰国後の2009年、漆塗りや陶芸、象牙彫りなど五つの伝統工芸の名匠を支援する会社を設立した。中国には象牙彫りの国宝級の名匠が12人ほどしか残っていないが、薛はその一人、62歳の李春珂を探し出した。住まいを世話し、北京に象牙彫りの工房を開設して、この立派なギャラリーも開いた。陳列されている工芸品は売り物ではない。薛は李のただ一人の顧客なのだ。

「ゾウは人間の良き友人です」と李は言う。「ゾウは死ぬとき、来世のために善行を積もうと、人間に何かを残すのです」。李は、ゾウの贈り物を大切にするために象牙を彫るという。仏教徒として、薛も李も殺生を嫌う。象牙は政府から支給され、自然死したゾウのものだと、二人は説明する。

「象牙はとても貴重です」と薛は言う。「お釈迦様を尊ぶ気持ちを表すためには、価値ある素材を使うべきです。象牙か、さもなくば黄金。でも、象牙のほうが価値があります」

中国で訪ねた店や工場ではどこでも、仏教の象牙彫りが在庫のかなりの部分を占め、非常に高価な品物も多くあった。こうした彫刻は、軍の将校たちが上官へ贈ったり(中国では軍人の給与は驚くほど高い)、企業が取引先や政府の取締官へ届けたりする。

広州市のギャラリーで、42歳の実業家ゲリー・ゾンに会った。彼がスマートフォンで見せてくれたのは、象牙の玉の写真だ。玉が26層

ゾウは広大な保護区と大量の水を必要とするのだから、象牙の形で富を還元すべきだとジンバブエの大統領は言った。

の入れ子になった手の込んだ彫刻で、市内にある大新象牙工芸工場で友人の実業家の分と合わせて二つ買ったのだという。ギャラリーを訪れたのは、玉の価値を確かめるためだった。

ゾンの真新しいメルセデスベンツに同乗し、二重のゲートで守られた高級住宅街に向かう。彼は自宅に戻ると、本誌の撮影のために、400万円の価値がある象牙の玉を3歳の息子に持たせた。この玉は、目下建築中の新居で魔除けのお守りにするという。なぜあなたのような若い実業家が象牙を買うのかと尋ねてみた。

「投資ですね。美術品としても魅力的です」

「ゾウの保護については？」

「考えたこともないですね」

広州には、象牙工芸店が集まる中国で有名な通りがある。そこで大々的に流れていた投資家向けの広告映像によれば、中国には2億人近い仏教徒がいて、仏教の宝飾品や仏具

の市場規模は約1兆3000億円で、年に50%のペースで成長しているという。

中国の象牙市場は成長の一途をたどりそうだ。現在少なくとも35カ所の彫刻工場と130店舗の工芸品店が、政府の認可を受けている。北京工業大学の象牙彫刻コースなど、政府の助成を受けて職人を育成する学校もある。そして何よりも、李のような象牙彫りの名匠が身内に技術を伝えていることが、中国の象牙産業の未来が明るいことを物語っている。

日本への売却が許可される

10分ごとに1頭以上のゾウが殺されていた1980年代。その最後の年である1989年に、ジョージ・H・W・ブッシュ米大統領が象牙の輸入を禁止し、ケニア政府が象牙の在庫12トン焼却処分した。その後、ワシントン条約締約国会議で象牙禁輸が宣言され、1990年から施行されることになった。ただし、禁輸に同意しなかった国もある。ジンバブエ、ボツワナ、ナミビア、ザンビア、マラウイは、自国のゾウの生息数は健全なレベルにあり、象牙取引に問題はないとして、条約調印を“留保”した。

1997年、ジンバブエの首都ハラレで開催されたワシントン条約締約国会議で、同国のロバート・ムガベ大統領が、ゾウは広大な保護区と大量の水を必要とするのだから、象牙の形でジンバブエに富を還元すべきだと主張した。ボツワナ、ナミビアと3カ国で共同提案を出し、禁輸措置を尊重する代わりに、頭数管理のために間引きしたゾウや自然死したゾウの牙の売却を認めるよう求めた。

会議では妥協案が採択され、この3カ国が1回限りという条件で日本だけに「試験的な売却」を行うことが認められた。1999年、日本は約50トンの象牙を500万ドルで買い付けた。その後すぐ、日本は再度の買い付けを希望し、中国も象牙を輸入したいと申し出た。



2011年、ケニアで押収された象牙5トンが焼却処分される模様を、中国の記者が伝える。
ケニアは1989年の象牙禁輸の実現に貢献したが、最近では象牙を備蓄している。焼却された象牙は他国産だ。

だがワシントン条約事務局は、試験的な売却の影響を評価してからでないと、再度の買い付けは認められないと考えた。問題は、売却によってゾウの密猟と象牙の密輸が増えたかどうかだ。事務局は、密猟の犠牲になったゾウの数と、違法象牙の押収量を調べることにした。

密猟者がゾウを殺すのは簡単だが(ケニアとタンザニアの密猟グループは、最近では毒入りスイカを使ってゾウを殺している)、密猟の実態を把握するのは至難の業だ。ワシントン条約事務局が調査を軌道に乗せるまでに何年もかかった。事務局は密猟されたゾウの年間の推定数を公式に発表することを拒んでいる。推定値が一人歩きして、事実として広まるのを避けたいのだ。とはいえ、事務局で密猟調査の統計を担当するケネス・パーナムは、2011年に少なくとも2万5000頭のアフリカゾウが密猟で殺された「可能性が高い」と教えてくれた。

押収された象牙の量から推定することもできる。2011年、世界全体で押収された違法な象牙は推定31.5トンにのぼる。国際刑事警察機構(インターポール)の経験則では、押収される密輸品は実際の流通量の1割だとみられているが、これを適用し、1頭のゾウから10キロの象牙がとれるとすれば、3万1500頭のゾウが殺されたことになる。正確な数がどうであれ、「重要なのは、昨年何万頭ものゾウが殺され、その数が急増していること」だと、民間の保護団体「セーブ・ジ・エレファント」のイアン・ダグラス＝ハミルトンは訴える。

違法象牙の取引量も把握しづらい。ある年に押収量が増えた場合、その背景には密輸量の増加もあるだろうが、当局が規制を強化したとも考えられる。押収量が減ったら、密輸量も減ったのかもしれないが、当局が賄賂を受け取って見逃した量が増えた可能性もある。何より問題なのは、押収量を集計することで、各国が押収ばかりに力を入れ、象牙密輸の元締め

を突き止めるという本来の目的を見失うことだ。そのため、優秀な捜査官は押収するだけでは問題は解決しないと考えている。

日本への売却の影響

ワシントン条約事務局は象牙の押収量を把握するため、野生生物の国際取引を監視しているNGO「トラフィック」に調査を依頼した。だがトラフィックは独立した調査機関ではなく、世界自然保護基金(WWF)と国際自然保護連合(IUCN)の下部機関だ。WWFとIUCNは象牙を取引している国々にも支部を置いて調査事業を進めているので、トラフィックが独立した立場で判断を下すのは難しい。トラフィックは、新しい象牙押収監視プログラム「ゾウ取引情報システム」(ETIS)の本部をジンバブエに置いているが、そのジンバブエはアフリカ諸国の中でも象牙取引推進の旗振り役だ。

当初からトラフィックは、ETISのデータベースには1989年の禁輸時点まで遡る集計値が入っているとしていた。しかし、各国が象牙の押収量をETISに報告するよう要請されたのは1998年のことで、それ以前の最初の10年間は、トラフィックが主要国で無作為に行った調査結果しか集計されていないのが実態だ。日本への試験的な売却の影響を評価する段階では、EU(欧州連合)と米国からの報告がデータベース全体の6割以上を占め、肝心のアジア諸国からの報告は1割足らずしかなかった。日本への売却の影響を判断しようにも、基になるデータの信頼性に問題があったのだ。

トラフィックはETISの統計で日本への売却と押収量には明確な関連が認められなかった。しかし、ワシントン条約事務局はこの報告だけでなく、他の国際NGOの報告も考慮に入れて、試験的な売却の影響を総合的に評価できたはずだ。実際、複数のNGOが、日本への輸出後に象牙の違法取引が増えたと報告している。

ワシントン条約事務局はETISのデータの限界を認めることもできたはずだ。押収量はあくまでも各国が報告した量で、どこまで報告するかは各国の裁量に任せられている。事務局は密猟の犠牲になったゾウの推定頭数も公表できないのだから、日本への試験的な売却の影響は判定できないと宣言してもおかしくなかったし、実験は失敗だったと認めてもよかった。

実際、中国はこの実験を失敗とみなした。

今や違法象牙の 最大の買い手が 中国だというのは、誰もが 認めるところだ。

中国は2002年の報告書で、違法象牙の流入量が増えた元凶として、日本向けの試験的な売却を挙げ、「多くの中国人がこの決定を誤解し、象牙の国際取引が再開されると受け取った」と警告を発した。

だが、ワシントン条約事務局は中国の警告を無視した。「ETISが提出したデータからは、日本への売却と違法取引にどんな関係も認められない」と、当時のワシントン条約事務局長ウィレム・ウインステカーズは発言している。ETISの責任者トム・ミリケンも「象牙の違法取引が(試験的な輸出後)5年にわたって、減り続けていることは明るい材料だ」として、日本への売却は成功だったと結論づけた。

ミリケンは違法な取引の実態を把握していたわけではない。知っていたのは押収量のデータだけだ。それでも、事務局はこの試験的な売却の影響を評価した。十分なデータなしに判

断を下し、2回目の試験的な売却を認めたのだ。

日本への輸出再開に懸念を示していた中国も、2004年にはワシントン条約事務局に象牙を買い付けたいと申し出た。事務局は2005年3月にミリケンら3人の調査員を中国に派遣し、象牙取引の規制状況を5日間にわたって視察させた。調査チームは「合格ライン以上」だと報告し、中国の規制システムなら「違法取引を撲滅できるか、少なくとも大幅に減らせる」と予測した。一方で、象牙の違法取引増加の最大の要因が中国だとETISの報告書に書かれていることも指摘した。そのため、事務局はこの時点では中国の買い付け許可を見送った。

もっとも、データはたやすく操作できる。ETISでは、象牙の押収量と違法取引の摘発件数で各国の規制実績を評価している。観光客から象牙のイヤリングを押収するなど、小規模な摘発を多数報告することで評価を高められるのだ。「件数を増やすために、チャットチャック(バンコクの市場)で手入れをやるようミリケンに言われた」と、タイの取締官は不満をもらす。

日本への試験的な売却が行われた1999年には、中国はETISにわずか7件しか違法象牙の押収を報告していない。買い付け要求を出して間もなく、年間数十件を報告するようになったが、その大半が観光客の個人的な所持品だ。ここ数年は年間数百件を報告している。今年2月の中国当局の発表によると、2011年に実施した最大規模の捜査では、4497人の人員と1094台の車両を投入して19件を摘発したという。だが、押収された象牙の量はわずか28.8キロ。太ったプードルほどの重さでしかない。

2008年7月、ワシントン条約事務局は中国の象牙輸入を認める判断を下した。トラフィックとWWFがこの判断を支持し、条約の締約国も承認。同年秋にボツワナ、ナミビア、南アフリカ、ジンバブエが競売を行い、合計104トン余りの象牙を中国と日本の業者に売却した。



フィリピンで最も大切にされている聖像「サント・ニーニョ・デ・セブ(セブ島の幼きイエス)」をたたえる、年に一度のパレード。200万人ものカトリック教徒が参加する。奥に立つのは「慰めの聖母」像。頭部と手が象牙でできている。セブ島で象牙を指す言葉には聖像の意味もある。



タイのスリンにある、飼育されていたゾウの墓地。タイでは飼育されたアジアゾウの牙の国内取引は認められていて、密輸業者はアフリカ産の象牙をそれと混ぜて売っている。

日本への試験的な売却の結果から中国への輸出の影響を予測するのは、かなり無理がある。日本は周囲を海に囲まれ、象牙の主な用途はせいぜい印鑑くらいだ。一方、中国は14カ国と国境を接し、長い海岸線をもつ。経済は急成長中で、人口は日本の10倍以上あり、アフリカに精力的に投資している。象牙の用途も彫刻品から携帯電話のカバーまで幅広く、膨大な需要がある。日本が象牙を買い付けた後、中国は密輸が増えたと苦情を申し立てていた。今ではその中国も買い付けているのに、ワシントン条約事務局は問題ないと言い張っている。

闇業者より高値で売る中国政府

中国でワシントン条約の管理責任者を務め、野生生物取引を取り仕切る孟憲林から、驚くべき事実を聞いた。2008年の南部アフリカ諸国での競売は、実際には競売ではなかったと

いうのだ。日本側が事前に中国と話し合い、それぞれ違った種類の象牙を買い付けるよう申し合わせて、落札価格を低く抑えたという。孟によると、最初に競売を行ったナミビアの当局者は、価格が低すぎることを不審に思い、不正の証拠をつかもうと、中国と日本の業者を追いかけて他の国々を回ったそうだ。

それでもワシントン条約事務局にとっては、競売は成功だった。南部アフリカ諸国は1550万ドルを調達でき、その大半を野生生物の保護に充てることにしていた。平均価格が1キロ約147ドルと低かったため、中国政府が市場に低価格の合法象牙を流通させれば、密輸業者は市場から締め出されるだろうと、事務局は考えた。事務局がつかんだ情報では、違法象牙には1キロ850ドルもの値が付くという。ウィンステカーズ事務局長はロイター通信の取材に、価格低下で密輸が減るだろうとコメントした。

ところが、中国政府は予想外の行動に出た。象牙の販売価格をつり上げたのだ。政府系の「中国工芸美術協会」を通じて、政府は買い付け価格に650%もの上乗せをした。北京で会った実業家の薛平は、象牙を1キロ1095ドルで買ったと言っていた。北京象牙彫刻工場は、最高級の象牙に1キロ1168ドルも払ったという。政府はまた、流通量を制限して価格低下を防ごうと10カ年計画を立て、1年間の放出量を約5トンにした。中国では象牙の売買には政府の認可が必要だ。中国政府は低価格競争を仕掛けて闇業者を廃業に追い込むどころか、独占的な立場を利用して闇業者より高い利益を得ようとしたのである。

ワシントン条約事務局の理屈で言えば、高価格で流通量を制限した中国政府のやり方では、むしろ密輸がはびこることになる。実際、中国の買い付けを認めたために、象牙の密輸は今まで以上に活発になったと、国際的な監視団体も指摘しているし、中国本土と香港で私が会った業者たちもそう言っていた。

象牙の価格は上がり続けている。広州の大新象牙工芸工場の販売部長によれば、今や未加工の象牙の価格は、中国がアフリカで買い付けた価格の20倍に跳ね上がっているという。

2011年8月のワシントン条約締約国会議でゾウが議題にのぼる前に、中国は参加したNGOを追い出しにかかった。近年の国際会議ではあり得ない行動だ。ボーンフリー財団や、ヒューマン・ソサエティー・インターナショナル、日本象牙美術工芸組合連合会などのほか、ナショナル ジオグラフィック誌の取材で来た私も締め出された。トラフィックのミレンは残ることが認められ、ETISの最新データを発表した。

孟はNGOを追い出した理由について、ロンドンに本部を置くNGO「環境調査エージェンシー(EIA)」の報告書のせいだと言う。EIAは覆面調査員を中国に送り込み、中国市場で流

通している象牙の最大9割が密輸品で、2008年の競売で違法な象牙取引が活発になったと報告した。孟はこれに激怒した。EIAの報告書は8割がた事実だと認めた上で、「まず、われわれに話をするのが筋だ」と息巻く。

昨年、ワシントン条約事務局は「象牙の違法取引に関する多くの状況について、引き続き理解しようとする努力をしている」という、あっけにとられるようなコメントを発表した。今年4月、ミレンが英国放送協会の取材で語った言葉は、日本への試験的な売却の後に中国が発した警告と驚くほど似ている。「中国に合法象牙の売却を認めたことで、事態が悪化したかと言えば、確かにそう言ったと言わざるを得ません。中国の潜在的な顧客の多くに、象牙を買ってもいいと思わせることになったようです」

孟のグラスにビールを注ぐと、彼は思い出し笑いをして、こんな話をした。アフリカから象牙が中国に到着したあと、積み荷の一つから奇妙な音がしたという。競売で最も上質で白く見えたのは南アフリカの象牙だったが、その一部がひび割れ始めたのだ。「メリメリ音がしていたんです」。どうやら南アフリカの業者は、高値で売るために象牙を漂白したようで、その象牙が乾燥して、ひび割れたというわけだ。

草原に生息するアフリカゾウの白い牙以上に価値があるのは、森林にすむマルミゾウの黄色い牙だ。大新象牙工芸工場で「最高級品」だと見せられたのが、マルミゾウの牙だった。この牙を使った工芸品はすぐに売れるので、工場に直接注文が来るという。ここで問題なのは、中国が合法的に象牙を買い付けた国にはマルミゾウが生息していないことだ。生息地はカメルーンなどアフリカ中部と西部。今年に入ってカメルーン政府はイスラム教徒の密猟者たちを一斉検挙している。

ワシントン条約締約国は来年3月のタイでの会議で、アフリカゾウの未来について話し合う。□